

第2章 世界遺産 大シルクロード展 第1章

シルクロードは、ユーラシア大陸を横断する経済、文化、思想の交流の大動脈として知られています。現代のような便利な交通手段が存在しなかった時代には、荷物を運ぶ隊商（キャラバン）が長距離を移動し、時には命を危険にさらしながら、草原、雪山、砂漠を越えて、地球の四分の一週に及ぶ壮大な旅をし、人類の歴史において重要な役割を果たしました。

シルクロードの研究は、19世紀後半から現在まで140年の歴史があります。中国でも早くからシルクロードの学術調査や研究が行われ、「シルクロード」という言葉は一般にも広く知られたものになっています。日本では、半世紀前に放送されたシルクロードを紹介するテレビ番組が人々に深い印象を残し、遠いシルクロードの地は憧れの対象になりました。

2014年、「シルクロード：長安 — 天山回廊の交易路網」は世界遺産に登録されました。その後、中国ではシルクロードの学術調査や研究がさらに進められ、新たな考古学的発見が相次いでいます。

本展覧会は、シルクロードが世界遺産に登録されてから、中国の国外で初めて開催される大規模な展覧会となります。中国の世界遺産やシルクロードの文化の精華が紹介され、その中には日本初公開の展示品も含まれています。中国の全面的な協力により、空前の規模でシルクロードの名品を展示することができました。日本と中国は、シルクロードを通じて長い文化交流の歴史があります。本展覧会でその深い絆を再認識することができれば、これ以上の喜びはございません。



第1章 民族往来の舞台 ——胡人の活動とオアシスの遺宝

青銅器時代より以前から、中国の北部と西部地域はユーラシア草原地帯の青銅器文化と一定の交流がありました。草原民族の独特の文様、服飾、伝統文化には、東西文明の融合が見られます。前漢の張騫による西域の開通で、東西の文明交流が促進されました。

歴史上、中国ではシルクロードを行き来した各国の商人、使者、僧侶たちのことを総じて「胡人」と呼んでいます。実際には、これらの胡人には中央アジア人、西アジア人、南アジア人など、さまざまな地域の民族が含まれていましたが、その中でもソグド人が最も重要な働きをしました。

ソグド人の発祥の地はソグディアナという地域で、その言語は東イラン語派に属します。ソグディアナは現在のウズベキスタンにあるゼラフシャン川河口に位置し、ユーラシア大陸の重要な交差点でした。こうした地理的な優位性により、ソグド人は地域間貿易を主要な活動とし、古代中国では、彼らは仲介者の役割を果たしていました。長い歴史の中で、彼らは商業の能力を最大限に発揮し、頻繁な貿易の往来を通じて、西域の技術や物資を東アジアの中心地に持ち込み、中原の特産品を西域に輸出しました。ソグド人は、北朝や隋唐の王朝にあって、馬の管理、外交、貿易などの重要な業務を担ったこともありました。

6世紀以降になると、突厥、回鶻、吐蕃などの民族もシルクロードの貿易や文化交流に加わりました。

この章では、新疆ウイグル自治区、甘粛省、青海省、浙江省、寧夏回族自治区などの博物館で所蔵されている紀元前から唐時代の作品を紹介します。異郷の風格を示す貴重な文化財により、多様性と包括性を合わせ持った古代中国の寛容な文化の様相をご覧ください。



第2章 東西文明の融合 ——響きあう漢と胡の輝き——

紀元前2世紀、前漢の武帝は張騫を西域に派遣し、これにより次第に中国と西洋の交流の道が開かれました。紀元前60年には、前漢は西域の管理機構として西域都護府を設置して、シルクロードの安全を確保し、長安や洛陽を訪れた隊商をもてなしました。前漢の政策により、中国と西洋の文化と経済の交流は繁栄期に入りました。現在の山西省南部、河南省、四川省地域で作られた絹は、中央アジアを経てローマに輸出され、中原の鑄鉄技術、農耕技術、紙や火薬の製法などは、シルクロードを通じて西へ伝わりました。

漢王朝が滅亡したあとの中国では、三国の鼎立や五胡十六国の興亡、南北朝の対立が続き、西域経営は低調化しました。

7世紀の唐代は、シルクロード全盛期とも言える時代です。貿易と文化交流はこれまでにないほどに盛んに行われ、東西の文明が融合し、壮大な景観を示しました。中国に居住する胡人も増え、国際色豊かな社会状況を反映して、異国風の装いや美術、舞楽が流行しました。中国の伝統と西方の新しいデザインが融合し、大都市の長安と洛陽を中心に漢文化と胡文化が響きあい、数多くの優れた美術作品を生み出しています。

この章では、大都市の長安と洛陽からの出土品を中心に、甘粛省、陝西省、山西省、河南省、浙江省、江西省などの博物館で収蔵されている漢から唐時代の作品を紹介し、シルクロードの発展と繁栄の姿を紹介します。中国の伝統的な生活に取り入れられた多様な文化的要素が活力を生み出し、その見事に調和した姿を見ることができます。これらの貴重な文化財は、東洋と西洋の文明が相互に影響し合いながら共生し、繁栄してきたことを示してくれます。



第3章 仏教東漸の遙かな旅 ——眠りから覚めた經典と祈りの造形

中国に仏教が伝わったのは西暦1世紀ころと考えられています。そのルートは大きく北伝(中央アジア経由)と南伝(東南アジア経由)があり、北伝ルートには数えきれないほどの仏教遺跡が残っています。その中でも最も有名なオアシス都市の一つは敦煌です。敦煌は重要な仏教の中心地であり、石窟の壁画や經典が、シルクロードにおける仏教の影響力を示しています。

シルクロードを通じて、仏教は東西の思想と文化を融合しました。中国の仏教は、師弟間の伝承と禅の修行に重きを置き、中国の伝統的な思想や文化とも一致して、仏教に開放性と包容性をもたらしました。また、インドで生まれた仏教と仏教美術は新たな発展を遂げ、日本をはじめとする他の国々にも大きな影響を与えました。

シルクロードを通じて、ガンダーラの仏教の造像芸術が中国に伝わり、魏晉南北朝を経て隋唐時代には、仏教の造像芸術が興隆しました。仏教徒が作り出した数多くの經典、石窟造像、壁画などによって、人類の貴重な芸術文化の精髓が受け継がれています。これらの文化遺産は、歴史を認識し、シルクロードを理解するための重要な視点を提供しています。

この章では、世界遺産・敦煌莫高窟で発見された『法華經』の写本と、近年トルファン
のベゼクリク石窟で発見された『法華經』をあわせて展観します。また、ホータンやトル
ファンの寺院址で出土した仏教壁画や、敦煌莫高窟の色鮮やかな壁画の模写を展示し
ます。また麦積山石窟の可憐な塑像に加え、中国仏教彫刻の真髄ともいえる石仏につい
ては、陝西省、山西省、河南省、河北省の博物館の優品を紹介します。